

## 幼児の攻撃性

友定 啓子

はじめに

一九九八年は、「学級崩壊」現象が大きな社会問題となった。以前から、中高生の危機的な変化については多様な形で警告はなされていた。神戸の事件は、大人達を震撼させるほどの危機感を与え、「キレル」「ム

カツク」ということばが不可解な彼らの行動を読み解くキーワードになった。ところがこの年に入って、それまで公開されることになかった小学校の教室での子どもたちの姿が、NHKのドキュメンタリー番組の映像を通じて、公にされた。それまで漠然と抱いていた小学生への不安が、一挙に像を結んだ感があった。

そして今、小学校教師はその原因を幼児教育の現場に求めてきた。幼稚園や保育所で自由に遊ばせてばかりいるからこうなるのだと。入学前に行われる幼小連絡会の席上で、「自分たちは授業をやるのが仕事だから、ちゃんとそれができるようにして送ってほしい」という要望が強く出てきている。私はこの思考パターンに、子ども達の生をまるごと引き受けようとしている、日本の教育の硬直した精神を見る。

### あてもなく離脱する子どもたち

確かに、子ども達の行動は、子どもは授業に黙って応じて当然だと考えている限りでは、それこそ、こちらがキレそうになるようなものだった。

しかし、ことは「しつけ」直せばすむような、そう単純なものではない。大人や教師という立場を一時留保して、子どものところの人に人として寄り添っていかないかぎり、この問題の本質は見えてこないと思

う。子どもを、大人の求める子ども役割に押し込めようとする支配的關係に、子ども達は嫌気がさし、そこからあてもなく離脱しようとしていると、私には思えてならない。これまでの大人と子どもの關係が、足下から崩れかかっている。

私は、映し出される子ども達の幼さに驚きつつも、一方で、そうだろうなあ、十分あり得るという思いもしていた。おそらくこれは、あの映像を見た多くの保育関係者の感想だと思う。子ども達は、自分をもっと見つめてほしいという切ないような渴望感に満ちていた。そして、子ども達のそういう感情に、いちいち向き合っていられない教師達の非人間的な状況も映し出していた。授業が大事なのか子どもが大事なのかと問い返したいくらい、教師達は授業に縛られていて、気の毒でさえあった。教師達は試行錯誤の末、やっと、自分たちが変わらなければ、何も進まないというところに達したようである。

荒れた子一人にゆっくり向き合ってやれないほどの、学校生活のゆとりのなさ、その中で教師達の必死の努力すらも、他の子どもたちの羨望や嫉妬のまなざしにさらされるといふ現実まであった。学校は子どもの感情を受けとめてやることができないでいる。子ども達の感情に地殻変動が起こっていて、教師達は子ども達のやり場のない衝動の標的にされようとしているのではないかと思う。学校のありようも根底から揺さぶられているのである。

もう小学校、特に低学年では、一斉授業の形態そのものを見直した方がいいのではないかと私には思えた。学習指導要領の大改訂が行われ、要求水準が引き下げられた。さらに文部省は学級定員を三〇人に減らす方向を検討しはじめた。それは、現状打開にひとつの力になるだろう。しかしその上でさらに、学校を「子どもと大人が生活する場」としてとらえ直さない限り、そこにいる子どもも大人も人間性を取り戻せないような気がしている。

## 保育現場で

保育の現場では、幼児達が変わってきたという認識はもうとつくに当たり前になってきていて、保育者達の悪戦苦闘はすではじまっている。ただ、社会的にさほど問題視されなかっただけだ。保育臨床学あるいはカウンセリングマインドというスタンスがしきりに言い出されたのは、数年以上も前である。

「臨床」とか「カウンセリング」ということは、すでに子どもが病んでいる、あるいは問題を抱えているという認識の上に成り立っている。「自由に遊ぶ」という自分の意志に基づいた行動さえできない、周囲の子ども達と関わりを持ってない子ども達が着実に増えてきている。それがクラスに一人二人ではなく、数人はいて相乗作用をもたらし、トラブルが連日のように起きている。クラスに不安定な子どもが一人いれば、それに影響を受け他の子ども達が不安定になる。その間を保育者は駆けめぐるって、何とかしてそれぞれの子どもが充

実した生活ができるようにと、日々腐心している。行動的に目立つのは男児だが、かといって女児が安定しているわけでもない。腕力を使わないだけである。

このささやかな論考で、私のとらえた保育現場での幼児の姿から、今、彼らに何が起こっているかを改めてとらえ直してみたいと思う。

### 幼児の攻撃性

梅雨の合間で、久しぶりに晴れた日のことである。四歳のクラスに入って遊んだ。さとする君とまさと君とるみちゃんの三人だ。穏やかに遊んでいたのに、突然、男児グループがさとするのところにやってきて襲いかかるといふアクシデントが起こった。状況がわからず、抵抗もしないさとするを、たかしが何度も殴る。や



めそうにないので、私はたかしの腕をつかんで止めに入った。理由を聞くと、「だって、こいつが〇〇を叩いた」と言う。さとするはずっと私と遊んでいたの、そうだとしても、時間的にずいぶん前のことだ。よくわからないが、仕返しに来たらしい。正義の味方のつもりで叩いているようだ。たかしは「悪いのはさとするだ」と言う。叩かれた人を連れておいでと言ったが、たかしはそれは聞かず、今度は私に向かってくる。しかも、それを見ていた別の子どもまでが私にかかってくるという事態になってしまった。このままでは、乱闘(?)になると思ひ、その場は立ち去った。担任の先生が事情を聞いて下さった。

こういう姿はそう珍しくない。保育園の一、二歳児クラスで、正義の循環とでも言いたいようなことがある。AがBを泣かすと、たちまちCがとんでいって、Aを叩きに行く。それを見たDが、こんどはCを泣かすというものだ。子どもなりの精一杯の「泣かす子は悪い子」

という表現だと思うが、事情抜きでやるので、ちょっと困る。だんだんわけがわかるようになって少なくなっていくが。

この場合は四歳児だから、相当の理由を持っていると思うが、その理由をことばで言わずに、いきなり叩きに行くところは同じだ。きっかけは正義感だとしても、行動に含まれた感情は違うと思う。私はやむなく力で止めた。その私の行動は、たかしにとつてはいわれのない攻撃を受けたと感じられたのではないか。すぐに反撃の行動が出てくる。それは、何かこう、自分を否定することはとにかく許さないという感じだ。それを見ている子どもにも、連鎖的な攻撃行動が出てくる。感覚だけで動いているという感じで、こうなるとことばは通じない。まずは落ち着くのを待つしかない。

### 攻撃される学生達

この子ども達にはこの日はじめて会った。私は子ど

も達にとってストレンジャーということになる。「ストレンジャーは襲撃される」というのが、四、五歳児の一般原則である。

もちろん、すべての子どもがそうだというわけではない。大多数の子どもは好意的に迎えてくれる。クラスで一人、多くて数人程度の話だ。しかしその何人かがいへんなのだ。彼らは担任の先生には決してこのような行動はしない。先生との人間関係ができていないからだ。実は、私もほとんどやられることはない。少し年配になつていたので遠慮してくれるのだろう。

しかし、学生が観察や実習でクラスに入ると格好の標的にされる。学生達は不器用ではあるが、基本的に子どもに対して好意的である。それ故こういう子どもの攻撃に対して無防備で、驚き、混乱してしまう。怖がったり、適当にあしらったり、へたに受け入れたりしてしまう。きちんと対処しないと、子ども達は学生に對して、「攻撃しても反撃しない、弱い、おもしろい」と認定してしまう。そうになると、子ども達の行動はエ

スカレートする。はじめはふざけ半分であつても、その内に自分が仕かけた行動と相手との応答の中で、ハイテンションになつてしまい、自分をコントロールできなくなる。そうなつたら、「やめて」とか「痛い」とかいう相手のことばは耳に入らなくなつてしまう。それを止めにはいると、また反撃していくのである。

相手も自分も見えず、相手にも感情があるということ、相手は痛いのだということに、思いが行かない。思考回路が切れてしまうのではないかと思える。攻撃感情に引きずられ、自分が何をしているのかがとらえられていないのだから、当然かもしれない。

### ねじれ表現としての攻撃

学生の方は、幼児とうまく遊べるだろうかと不安を持ってるところへ、はじめからこんな幼児達に出会うと、自信を失つてしまう。自分は子どもに嫌われるらしいと思つてしまう。もちろんこういう現象は、ずっと以前からあつて、私も数年前までは保育実習の

洗礼だくらいにしか思つていなかった。しかし、学生達も変わつてきていて、これを受けて立つことができな。すると、子ども達の攻撃は発展してしまう。私は学生達に作戦を授けた。

こちらがやられるだけの遊びにはつき合わない。攻撃をしかけてくる子どもは、しっかり自分の方を向いてほしいという気持ちが底にある。充実した遊びを見つけれないでいる状態でもある。その子に「たたかれるのはいやだ」とはつきり言い、真剣に向かう。基本は、中心になつている子ども達と心を通わすこと。

「○○君とちゃんと遊びたいから、別のことをしよう」と提案する、というものだ。学生達は覚悟を決めて、以前より落ち着いて子ども達に対処した。

「今回も、始まりはまことからの攻撃であつた。彼はきょう、武器を持ってパワーアップしており、着替えの入った袋をブンブン振り回しながら向かってきた。

「またしてもこれか」と思つたが、講義での先生の「基本は子ども達と気持ちを通わすこと」ということ

ばを思い出し、『何でたたくの？痛いなあ』と言い、まことに近寄った。すると、少しはにんだような笑顔が見えたのだ。少し気持ちが通ったような感じがした」（四歳児）。

「最初私は子どもに攻撃される役だった。子ども達も『お前は誰だ』としきりに聞いてきていた。私は子どもからしてみれば、急に自分たちの前に現れた見知らぬおばさんだったに違いない（私は小さい頃、二十歳以上の人はおばさんだと思っていた）。それでとりあえず攻撃してみて、どのくらい自分たちと遊んでくれるのかを試している感があった。ずっと攻撃しているうちに、子ども達は、私は敵ではないと認識してくれたいらしい。むちゃくちゃな攻撃はされなくなった。すると今度は、遊びに参加させてあげてもよい存在に格上げしてもらえたいらしい。一緒に何かを作ったりする遊びに入れてもらえるようになった。そうして遊んでいるうちに、私は“お前”ではなく“先生”と呼ばれるようになつた。扱ひも、攻撃の標的でもな



く、また、遊びに参加させてあげている人、でもなく、一応子どもなりに気を使ってくれるようになった。

私はだんだん変わってくる自分に対する認識にとまどいながらも、子どもとの関係をつくっていくことの大切さを感じた。またそれは、子どもと同じく関わっていかなくてはできないものだと感じた。子どもの気持ちをひとつひとつ受けとめてやる事が、関係をつくっていく上での第一歩だと、今回の観察から感じた」（四歳児）。

このように、子ども達はねじれてやってくる。しか

し、こちらがちゃんと自分を差しだし、相手に向き合うと、驚くほど素直な表情を見せる。

「廊下にいると、前回私に叩いたり蹴ったりしてきたとしゆき君が近寄ってきた。『なんだ、お前。この前くるなって言っただろう』と叩いたり蹴ったりというしぐさをする。そして手を握ってきた。少し甘えたしぐさをする。私は『ねえ、覚えてた』と聞くと、『覚えてるよ。この前から覚えてるよ』と、手を握ったままにいる。そして、しばらくして保育室の中に戻っていった」(五歳児)。

一見、攻撃的ともいえることばの陰に、こんな気持ちが隠されている。しかしこちらが少し対応を間違えれば、拒否的な感情を誘発しかねない場面である。

幼児は、自分の感情に率直に行動する。今も、大多数はそうである。しかし、このように人を求めているのに、それがねじれてしまつて、正反対の攻撃的なことばや行動になるのは、どういうことだろう。求めているものは、どうせ満たされないのだというあきらめ

や怒りが、そうさせているのだろうか。あるいは、そういう強い挑発行動をとらないと相手は自分の方を向いてくれないと、学習しているのだろうか。相手が自分の味方であるかどうか確かめるのに、なぜ、さんざん攻撃しなければならぬのだろうか。そんなに人を試さなければならぬほどの、不信任が横たわっているのだろうか。許されるなら、人を殴りたいという衝動は、どうしたらいいのだろうか。

ただわかるのは、子ども達一人一人が、自分をしっかり受けとめて欲しいと願っているということである。家庭ではどんな人間関係を結んでいるのだろうか。案外、そのような感情が、受けとめられていないのではないかとも思われる。そうだとすれば、教育の場でそれを引き受けていくしかないだろう。

(山口大学)